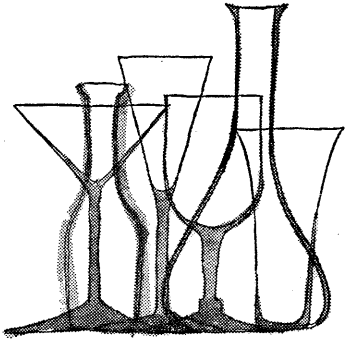
近代短歌に現われた子ども（最終回）

大塚　雅彦



（47）服役囚の歌

死刑囚のようにいつ執行の呼び出しがあるかわからぬ恐怖に脅えつつ、「壁厚き部屋」に日を送る者でなくても、刑務所の中にいわゆる囹圄の身を閉じこめられて、贖罪と更生の日々をすごしている人々が、この世には大勢いる。こんにち刑事政策の面で、施設内処遇よりも施設外処遇、社会内処遇の方を高く評価し、その方に矯正効果を期待する趨勢が強くなっているけれども、刑事施設に犯罪をおかした者を収容して、さまざまな矯正方法を用いて、彼等のいわゆる改過遷善を図るのは、人類が長い間かかって獲得した知恵であり、歴史のつみ重ねであるだろう。ただ刑事施設に関しても、従来のように隠蔽主義的、閉鎖主義的に社

会から囚人を隔離して、特殊なテリトリーの中で彼等を教育しようという方法よりも、出来るだけ社会との連関の中で、許容し得る限り開放施設的な面を採り入れて、服役者を出来るだけ早く社会に再適応させようとする近代的な考え方もまた強くなっている。

このような傾向を反映してか、従来はいずれかといえばあまり世に知られなかった刑務所の実態や、所内の服役者の生活状況などを紹介する書物なども、最近はかなり増えつつある。例えば佐藤晴夫・小沢禧一『刑務所――その知られざる世界』昭58・1）は、全国に七十六施設もある刑務所について、その組織、運営等を、法務省勤務の長い著者たちが綜合的に概述したものである。また、網走（あばしり）刑務所といえば重罪をおかした者を収容する施設として「網走番外地」などのやや興味本位的な呼称で、マスコミ等で暗いイメージをもって扱われがちであるが、明治中葉に網走という嘗ての北辺の小漁村に「網走集治監」が創設され、それが「網走監獄」から「網走刑務所」と名称が変わり、九十余年の年月を経て今日に至る長い歴史をもっているのである。そして年間六十万人もの刑務所を訪れる観光客が今日では居るとのことであり、今昔の感に堪えない。山谷一郎『網走刑務所』（昭58・2）は、この刑務所内の文芸誌「樹氷林」の俳句と随筆の講師として所内に出入するようになった著者が、網走刑務所が「誤りを伝えられている部分も多い」ので「そうした誤りを正す意味も含めて、網走刑務所のありのままの姿を伝えたい」（あとがき）と書き綴った、すこぶる面白い著作である。ところで、不幸にしつ女子で犯罪をおかす者も少なくないが、それらの中、全国の女子刑務所五ヶ所に服役中の受刑者は現在、千数百人居るものと思われる。早瀬圭一『長い午後――女子刑務所の日々』（昭58・2）はジャーナリストの著者が女子刑務所を訪い、その実態や女囚のライフ・ヒストリーや所内の生活状況を紹介したもので、その叙述は三つの物語が中核になっている。すなわち、㋑夫に裏切られて離婚し職を転々とする中に、未熟児で知恵遅れのわが子と無理心中を計り、子どもだけを死なせたT子、㋺酒びたりの

上にギャンブルと女遊びをやめない夫を殺したE子、㈧同居の夫と義父母に八年間も虐待され、自殺未遂二回の末、遂に姑を殺したK子――である。いずれもこれ以上の不幸はないと思われる程、悪条件が集中的に一人の女性に襲いかかったケースであるだけに、読者に重い衝撃を与える。

これらはいずれも刑務所について書かれた読みごたえある著作であるが、多くの刑務所内で生活指導の一環として行われている文芸活動（短歌、俳句その他）による情操面の指導については、あまり語られていない。多くの刑務所内では短歌や俳句の会があり、篤志面接委員を依嘱している専門歌人や専門俳人を外部から招いて、囚人の創作活動を指導してもらって居り、機関紙のような歌誌、俳誌を発行しているところも少なくないのである。いま、その一、二を紹介しよう。

㈠歌集『壁を叩く者』

この歌集は熊本刑務所文化教育後援会から発行されており、私の持っているのはその『第三集』（昭39・11）と『第五集』（昭47・11）とであり、いずれも編者の故内田守人氏から直接私がいただいたものである。内田博士はライ園歌人島田尺草や明石海人らを世に出した人としてその項でも触れたが、歌誌「水甕」の同人であり、また自ら歌誌「人間的」を主宰する歌人であった。熊本刑務所で短歌の文芸活動を始めたのが早く昭和二十三年であるが、昭和二十七年から当時熊本短大教授をしていた内田氏に指導を依頼したのである。爾来、博士は所内の機関誌「とろく」（刑務所の所在地渡鹿（とろく）による命名らしい）歌壇の選者や月例歌会の指導を熱心につとめた。そして服役者たちの作品を合同歌集として第一集、第二集……と、次々に刊行して来たのである。

この『第五集』には西本願寺門主大谷光照、歌誌「水甕」主幹加藤将之（哲学者）、歌誌「群山」主宰扇畑忠雄（国文学者）、九州地方更生保護委員会委員長藤井恵、熊本刑務所長阿部房雄等の序文があり、編集者内田の「巻末の記」がある。そして、出詠者三十八名、歌数一

○七一首が収められ、併せて二十年間の優秀作三十名の四二〇首も収録されている。作品は編者によりわざわざ種類別に分類されている懇切さであるが、そのうち、主として「人の子としての哀歓」という項目等の中の、子どもを対象にした作品を抄出してみよう。

① 椅子引きて母坐らする仕種なす
吾子をし見れば大人さびたり
（彦山太郎）

② いつの間にか生えし乳歯に乳房をば
噛まれ痛しと妻よりの文
（大浜住人）

③ 面会を終えし吾が耳にコツコツと
去り行く吾子の靴音小さき
（仝）

④ 末の娘はまだみぬ父の写真をば
妻に持ちより問ひ責めるらし
（浜　たかし）

⑤ 含羞みの吾娘は妻の背にかくれつつ
時たま顔出し小声にささやく
（仝）

⑥ 吾娘の見るひとみはわれに向けられず
あやしく見つむ立会看守を
（仝）

⑦ 娘に渡る母子年金の手続に
在監証明送りてかなし
（成田森美）

⑧ 大いなる眸は聡明の相なると
思ひつつ吾娘と対話しており
（甲山五郎）

⑨ チューインガムパパも食めよと差し出しぬ
いとしき吾子よ抱きてやりたし
（松島景一）

①③⑤⑥⑧⑨等は、妻子が面会に来た折の作であろう。服役者が子と接触できるのは、妻が子と共に来る面

会の折と、妻のたよりによる情報や、同封されてくる写真等による場合以外はあり得ないから、子をうたう作品がこれらの場合に集中するのはやむをえない。②と③は同じ作者だが、二つの歌の子どもは違うようで、③の子の方が②の乳児の兄か姉かもしれない。④から⑥までも同一人の作だが、④の末娘と、⑤⑥の娘とは別の子で、後者の方が姉娘かもしれない。末娘は作者が入獄後に生まれたらしいのであり、それだけに未だ見ぬこの娘に寄せる作者の思いが、痛いほどよくわかる。⑥の歌や⑨の歌の下句は面会室のきびしい雰囲気を鋭く描き出している。⑦もまた、こういうことをせざるを得ない在監者の特殊な立場を、具体的に詠出している。⑧はここに金網を隔てて対面している父娘の状景が、眼に見えるようである。

㋺歌集『ともしび』

これは数少ない女子刑務所の服役者の合同歌集（女囚作品集）である。昭和四十五年二月、栃木刑務所刊で、編集者は安藤佐貴子・森口鶴子両歌人であり、この歌集も私は安藤女史（当時、歌誌「地表」編集代表者）からいただいたものである。矢島栃木刑務所長の序文と、和久同所教育課長及び両編集者の「あとがき」があり、八十七名の女囚の作品を収めている。この女子刑務所が、篤志面接委員を兼ねる両歌人（桐生市在住）に服役者の短歌指導を委嘱したのは昭和三十九年であるが、以後五年間の彼女等の作品を集めたものである。作者名はむろんペンネームで、本名ではない。「〈犯罪の蔭に女あり〉という言葉は常識のように言われるが、ここばかりは〈犯罪の蔭に男あり〉と言う言葉があてはまる程、男で苦労しているひとが多い」という安藤女史の言が、この刑務所の囚人たちの特色を一言にしてよく語っているが、「本集の作者はその殆んどが、ここへ来てから作歌をはじめた人たち」（安藤）ということも心に置いて、読者は読むべきであろう。

① 母吾のつとめ済むまで学びやめ

山に働くと子の便り来ぬ
（伊井かづ子）

② この中のどれかを吾子が選ぶやも
ズック縫製なしつつ思ふ
（石坂伸子）

③ 寄り添ひて来し子の髪に陽の匂ひ
溜りて快かりしを思ふ
（牛島よし子）

④ 久々に出でし獄庭に「子とろ」して
転べば春の土の香のして
（小田加代子）

⑤ 獄に馴れ記すことなき今日の日記
吾子の名のみを書きてペン置く
（木本けい子）

⑥ 免業の日を降りやまぬ五月雨に
なすこともなく吾子想ひをり
（佐藤久江）

⑦ 売られゆく山羊の最後の乳のみて
常の如くに子は登校す
（杉浦文子）

⑧ 作業終へ今宵たのしむ盆踊り
遠く故郷の子を思ひをり
（武井久子）

⑨ 獄にゐる母とは知らず子の便り
「みやげ頼む」を繰返し読む
（竹山たか子）

⑩ 芹摘みし戸田の川面（も）の競艇に
拍手せし子の一周忌過ぐ
（寺山京子）

⑪ 子を托し来し囚友は張る乳を
双手に押へ作業場にゆく
（中山みさ子）

⑫ 移監さるる車窓に顔を寄せしのみ
夫子（つま）の住める小田原を過ぐ
（平田かづ江）

⑬ 面会の短き時を惜しみつつ

初孫抱けば乳の匂ひす
（福島みさ子）

⑭ 償ひの心を込めてわが張りし
この反物を吾子に着せたし
（古橋よし江）

⑮ 夫子恋ふるを生きゆく張りとけふの日も
心急きつつ風船を貼る
（星田とみ）

⑯ 禁酒すと誓ひし夫がひそかにも
子に酒買ふを頼みゐるらし
（仝）

⑰ 来賓の幼子走りて誰彼の
瞳を濡らす獄の運動会
（三田貞子）

⑱ 末の子の根雪の便り獄に来て
共にスキーに行かむと記す
（三田百合子）

⑲ 幸を希ひて吾子の年の数の
豆食む獄の節分の夜を
（八藤恭子）

⑳ 吾が腕にかけられし手錠を幼児は
無心に鳴らし戯れてをり
（山上敏子）

㉑ 久々に面会の子は金網の
外より我を「オバタン」と呼ぶ
（仝）

㉒ おのが手に命奪ひし幼子の
菩提祈りて短冊に記す
（仝）

いずれも一読歌意明瞭な作品ばかりなので、多く註釈の必要はあるまい。女囚の歌は男囚のそれに較べて、女性特有の問題(例えば⑪等)をせつなくうたう点や、いかにも女性らしいやさしい心づかいが出ている（例えば②③⑬⑭⑮⑯等）のが特色である。所内のきびしい規則、作業内容、リクリエーションをおのずから示す歌もある

（例えば②⑥⑧⑫⑭⑮⑰等）。⑬のように孫を持つような老囚（？）も居るのだ。⑯のように、やくざな夫を持つ女性も居る。だからこそ彼女の不幸も生じたのだろう。⑳㉑㉒は、思わずドキンとさせられる内容である。母である自分を子に忘れられている㉑ほど深刻な悲哀があろうか。㉒の作者が殺した幼子は自分の子か？　他人の子か？　「子殺し」事件の少なくない今日、色々と考えさせられる歌だ。ともあれ、囚人たちは出獄すれば作歌などやめてしまったり、忘れたりする者が多いだろうが、それでも少なくとも所内でまじめに作歌をすることに、内田博士の言う「短歌カウンセリング」的効果を認めることが出来るであろうことを、私は疑わないのである。

（48）非行少年の親の歌

非行少年自身の短歌作品を見ることはそう困難ではないし、私自身も家裁に長く奉職していた間に、何年も彼等の作歌を指導したことがあり、また、その作品を世に紹介したこともある（例えば拙著『非行少年』〈昭38・6〉所収「非行少年の歌」、拙著『非行を見る』〈昭43・5〉所収「非行と文学」等）。しかし、非行少年の親の短歌作品はなかなか見られない。非行少年の親で短歌を作る人はそう多くないかもしれないし、たとい作っても、自分の子の非行を恥じているから、あまり公表しないだろうからである。そこで本稿の最後に、その種の作品をすこし紹介しよう。新仮名づかいの作品である。

① 虞犯少年という語も知りぬわが直子
　　金なくなれば帰りてくれよ

② 子の行方夜なか報らせに来てくれし
　　潤ちやんは今鑑別所に住む

③ 堪えがたき言葉あびせられたる子が
　　帰りつつ警官を憎みののしる

④ 思うさまスクーター飛ばす爽快を

脚に怪我してなお子は言えり

⑤ 歳出の帳簿整えているときに
補導センターより呼出し受くる

⑥ 子のコート質受けするとのれん押せば
金借りに来ていたる少年

⑦ 愛情過多又冷たし又自信なし
子がぐれてより我へのことば

⑧ 鋭き刃当てられて血を吹くごとし
隣りに入りて子が盗みせり

⑨ 何かわけの判らぬものに憑(つ)かれたる
如きわが子のぐれてゆくさま

⑩ 働くという店書きし紙持ちて
道筋たどり子の嘘を知る

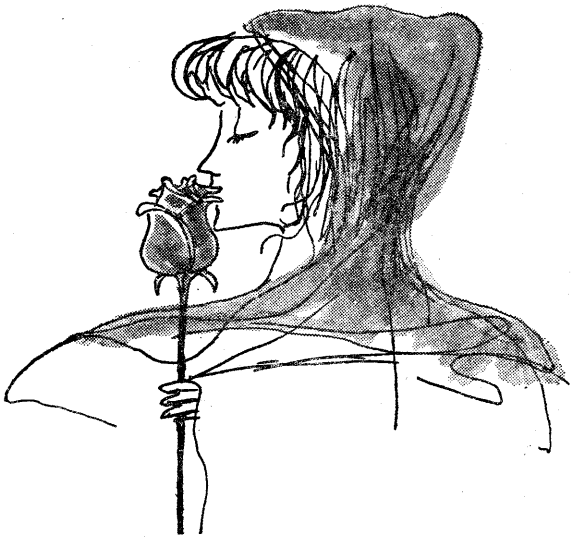
⑪ 子の性質幼時に決まると学者いう
戦争あり戦後あり夫の酒賭博ありき

⑫ 春来(また)たり十八才に子がなれば
わが籍抜けて人妻となる

すさまじい作品群であり、圧倒的な迫力をもつリアルな歌ばかりだ。なまじの少年非行に関する論文などを読むよりも、少年非行の様相や非行少年の親の心理を、はるかに味わい深く示してくれる。作者は関西に住む主婦で、姓名はあげないでおくが或る歌誌の会員である。この娘さんも既に立直って、今頃は良き主婦になっているようであることを付記しよう。

●おわりに

長い間、この連載を続けて来たが、今回をもって一応

完結に致したい。私は短歌に関する文章を今迄随分多く書いて来たが、今回のようなテーマで、こんなに長く書き続けたのは始めてである。自由に書かせて下さった編集部の寛大さに感謝申し上げたい。始めは短歌作品だけを簡単に紹介するつもりだったが、切角なら作者である近代歌人たちの経歴やアウトラインをも知ってもらおうと遠大な（？）志をたてたため、頭でっかちの説明が多くなり、思わず長い連載になってしまった。しかし、近・現代短歌史の中で、子どもをうたった短歌がこんなに多いとは、私も実は気付かなかった。その意味で私自身のためにも、よい勉強になった。また、終りの方の三分の一くらいは、今のわが国で大きな社会問題を提示する歌集などから作品を抄出紹介したため、すこしトーンが違ってしまった。私は執筆しながら、読者が、このように特殊な内容のものの連載を果して喜んで読んで下さるかを絶えず気にしながら、しかし同時にまた、子どもを愛し子どもに強い関心を持つ読者諸氏にこそむしろ読んでいただきたいと思いつつ書き続けた。読者諸氏にも感謝申し上げたい。（了）

（お茶の水女子大学）